



安部
光一
Kouichi Abe

Sleepy Lagoon

今年5月の連休、ある朝のできごとである。NHKが、「この人に聞く」を放送していた。インタビューを受けるのは、湯川れい子。

湯川れい子は、エルヴィス・プレスリー、ミック・ジャガー、マドンナなど海外有名人を知り合いだと自慢する、謂わば元祖ミーハーおばさんである。また自慢話が始まるのかなと聞くとはなしに聞いていた。

今回の話は、このミーハーおばさんを有名にした1966年ビートルズが日本に来たときの突撃インタビューだった。

思えば、ビートルズ来日から今年で50年になる。そんな意味もあってこのミーハーおばさんの特集になったようである。

司会者の女性アナウンサーが、湯川れい子に、「西洋音楽に親しんだのはどういうきっかけでしたか」という質問から始まった。湯川れい子はホテルオークラのビートルズが泊まったという部屋で以下のような話をはじめた。

れい子の家は、東京目黒にある海軍の軍人の家だった。れい子には10歳位年上の大学生の兄がいて、戦争が激しくなった昭和18年頃、陸軍の幹部候補生として出征することになった。

その兄が出征する前に家族への最後の御奉公だと言って、自宅に防空壕を掘ってくれた。そのとき兄はずっと同じ歌を口ずさんでいた。れい子が「何という歌ですか」と聞くと、「いや、僕が作ったんだよ。」と言うだけで歌の題名は教えてくれなかつた。兄は防空壕を作り上げた後も、出征するまでずっと同じ曲を歌っていた。れい子は、ずっとその曲の名を知りたいと思っていた。

そして終戦になり、東京には進駐軍がやって来た。兄はフィリピンで戦死した。

れい子は小学生になっていたが、よく風邪を引く子だった。風邪を引くと小学校の先生は、「学校を休んでいいよ。お家に

帰ってラジオでも聞いていなさい。」と言ってくれた。

れい子は家に帰り、一人ラジオの選局をしていると、突然進駐軍の大きな声の放送が聞こえてきた。うるさいと思ってスイッチを切ろうとすると、今度はトランペッタの音が聞こえてきた。それは聞き覚えのある曲だった。れい子の兄が防空壕を掘りながら口ずさんでいた曲だった。よほど人気のある曲だったのだろう。その曲は、毎日毎日ラジオから流れてきた。ノスタルジックで甘美な曲だった。れい子は色々な人に尋ね、その曲の題名が、ハリー・ジェイムスが作った「S l e e p y L a g o o n (眠れる熱帯の潟湖)」という曲だと知った。

ハリー・ジェイムスという人物を調べてみると、1930年代から1970年代にかけて活躍したトランペッター、楽団のリーダーだった。我が国では有名なグレン・ミラーと肩を並べる程の人物で、フランク・シナトラを見出した人物でもあるようである。見かけもデヴィッド・ニーヴンのようなハンサムな男である。これがダンスマュージックとなって、アメリカの若者、特に戦地に赴いていた軍人を虜にした。そのような甘さたっぷり、オリエンタルな雰囲気を漂わせた曲を、れい子の兄はいち早く電波やアメリカの雑誌で知り、口ずさんでいたのである。

曲を聞き兄の想い出が湧いてくると同時に、れい子の頭は混乱した。なぜ兄は妹に曲の題名を教えてくれなかつたんだろうかと。

軍人として出征するのに敵国の歌を口ずさむことがどれほど許されないことか、また重荷となっていたか。題名さえも妹に言えなかつたのだろう。そんな兄の想いを、終戦後れい子は知ることになったのである。

れい子は、兄が軍人として、また歌の美しさを知っている者として、時代の波に抗うことなく運命に従つた、謂わば、その強さに胸を打たれた。

そんなエピソードを聞いて、初めて私も「S l e e p y L a g o o n」を聞いたが、確かに私も聞き覚えのある曲である。グレン・ミラー全盛期に、グレン・ミラーの曲とその能書きは似ていると思うが、その甘美さは抜きん出ている。

このことを我がロータリークラブの音楽の先生である斎藤眞人先生に聞くと、この曲が有名になった原因の一つは、その旋律の中に何かオリエンタルな雰囲気があり、アメリカ人にとっては東洋に対するリスペクトみたいなものがあったのだと思うと言われた。「なるほど、そうか。」と合点がいった次第である。

しかし、戦争中のアメリカは、日本が歯を食い縛って戦っている間にハリー・ジェイムスといい、グレン・ミラーといい、またカサブランカといい、人間の情感を封じることなく、愛と男女の関係をテーマとし続けていることに驚きを禁じ得ない。

この人間関係の普遍的な感情を尊重する国こそ生き残るのではないかという気さえする。

その中で齋藤眞人先生から面白い話を聞いた。私が湯川れい子のエピソードを話すと、「日本の隠れキリシタンだってすごいですよ」と次のように教えてくれた。

1865年（慶応元年）、大浦天主堂を建てたフランス人宣教師プティジャンは、突然物見遊山風を装って現れた15人の男女が、「ワレラノムネ、アナタノムネトオナジ」「サンタ・マリアの御像はどこ？」と囁いたことに驚愕した。「300年もの間、この地でキリスト教の信者であることを隠し、守り続けていた日本人がいたとは！」。プティジャンは、早速このことをローマ法王に報告した。「日本人がこのような宗教性、そして普遍的なものを信じて守り抜く忍耐力があろうとは！」ヨーロッパ中が日本の信じられない出来事に驚き、騒然となった。

不思議な感動が…。

湯川れい子の兄といい、このような隠れキリシタンといい、自らがいいと思っているものを信じ、守り抜く。そして、時代の状況によっては、それを沈黙し続けた。その強さを日本人は持っているような気がする。

まずは、「Sleepy Lagoon」のトランペットの甘い旋律をYouTubeで何度も繰り返し聞いて貰いたいが、いいものはいいし、高い芸術性や信仰性など普遍的なことに対する欲求を日本人は兼ね備えていることを伝えたかった。

安部・有地法律事務所 所長